

令和 5 年 10 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00332

研究課題名(和文) 書肆作者と俳諧師作者による仮名草子・初期浮世草子の研究

研究課題名(英文) A Study of Kana Zoshi and Early Ukiyo Zoshi by Booksellers and Haikai Artists

研究代表者

中嶋 隆 (NKAJIMA, Takashi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40155718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：演劇と小説との様式的複合が見られる作品として、貞享5年刊江戸版『市野や物語』に焦点を当てた。小説と演劇との様式的複合は、事実と虚構とが作中に並存し、小説に時事性が付与されるなど、文芸の多様化をもたらすこととなった。

俳諧師西鶴の創作した小説の新しさは、読者の想像力が、異なる文脈の衝突から、新しい意味を創造した点にある。この関係は、前句に付句をぶつけて、打越と前句とは異なる意味世界を創造する俳諧連歌の方法と共通する。西鶴の矢数俳諧は、複数人の創作共同体を、一人の創作者と不特定多数の享受者に変質させた。西鶴小説の作者と読者との関係は、上/下の啓蒙的關係にあるのではなく、水平的關係にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では十七世紀の小説(仮名草子・浮世草子)を考証するにあたって、書肆作者と俳諧師作者の創作した小説を対象にした。メディアの主導した江戸期の文化現象の始原として十七世紀を位置づけたからである。本研究は、俳諧史・小説史・演劇史といったジャンル別文学史ではなく、諸ジャンルが渾然とした文化状況から、次第に様式性が確立されていく様相を俯瞰する文学史を構築することを最終目的にした。文化表象に出版メディアが介在する点では、江戸時代は、中世以前の文化状況と様相を異にする。一般的には江戸時代の小説は「古典」とされるが、むしろ近代の文化現象に近似しているとさえ言えよう。

研究成果の概要(英文)：As a work that shows the stylistic combination of theater and novel, he focused on the Edo edition of Ichino ya monogatari published in 1688. The stylistic combination of novels and theater brought about the diversification of literature, such as the coexistence of fact and fiction in the work, and the addition of topicality to novels.

The novel created by the haikai master Saikaku is new in that the reader's imagination has created a new meaning from the clash of different contexts. This relationship is similar to the method of haikai renga, in which an appendix is added to the preceding phrase to create a semantic world different from that of Uchikoshi and the preceding phrase. Saikaku's "Yakazu Haikai" transformed a creative community of multiple people into one creator and an unspecified number of beneficiaries. The relationship between the author and the reader of a Saikaku novel is not an enlightening relationship above / below, but a horizontal one.

研究分野：国文学

キーワード：出版メディア 浮世草子 市野や物語 矢数俳諧 好色伊勢物語 武道色八景 平野屋吉兵衛 江戸版

## 1. 研究開始当初の背景

近世初期(元禄末年以前)に成立した浮世草子を中心とした散文作品 139 部のなかから、書肆の関与が強い作品と俳諧師が作者となった作品について考察を行った。従来の歴史社会学的方法論によった文学史は、現在では顧みられなくなった。文化事象を唯物史観で決定論的に説明しても、文化そのものの解明にはつながらないからである。しかし、その点を前提にしても、社会状況のもたらした、その時代特有の文化構造を把握することは、文学史の通時軸の設定に不可欠である。

十七世紀には、中世以前の文学が版本メディアを通じて再編され、古典が印刷物によって享受された。Aという文化がAとして再生されたのではなく、メディアによってAと似たaとなり、中世以前よりはるかに多数の人々に受け入れられた。古代・中世の延長に十七世紀があるのではなく、断絶と無秩序のなかから、十七世紀文化が出現したのである。写本が主要なメディアだった中世以前には、文学を享受し生産したのは、公家・僧・上級武士などの上層階級だった。十七世紀には中層町人・富裕な農民・武士などの新しい階級が文学を創造する。彼らは、古典を書承ではなく、版本という新メディアによって享受した。また俳諧(貞門・談林の俳諧連歌)の流行が、彼らの古典受容の契機となった。

文学が大量生産され商品価値をもつと、啓蒙的立場にたつ、文化的上層に属した作者とは異なった作者層が出現する。書肆と俳諧師である。本研究では十七世紀の小説(仮名草子・浮世草子)を考証するにあたって、書肆作者と俳諧師作者の創作した小説を対象にしたのは、メディアの主導した江戸期の文化現象の始原として十七世紀を位置づけたからである。

本研究は、俳諧史・小説史・演劇史といったジャンル別文学史ではなく、諸ジャンルが渾然とした文化状況から、次第に様式性が確立されていく様相を俯瞰する文学史を構築することを最終目的にしている。江戸時代を通じて様式性の確立に影響をもったのは出版書肆であり、文化表象に出版メディアが介在する点では、江戸時代は、中世以前の文化状況と様相を異にする。それは、むしろ近代の文化現象に近似しているとさえ言えよう。江戸時代に成立した文学を古代・中世の延長上にある「古典」として把握し、明治時代に、古典と一線を画した近代文学が成立すると考える研究者が多い。私は、江戸時代文学を「古典」としてではなく「近代初期」文学として位置づける必要があると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、西鶴・芭蕉・近松優位の文学史観を見直し、作品の成立諸要因を多元化すること、すなわち複数の通時軸から十七世紀の文学の展開を総体的に把握することにある。特に、俳諧の文学的特性と出版書肆の発想から、新しい草子すなわち浮世草子が誕生し発展したという仮説をもとに、以下の観点から、作品を具体的に取り上げて、その書誌調査を含めた基礎的研究を行う。

### (1) 演劇と小説との様式性の複合についての考察

演劇と小説との様式的複合が見られる作品に焦点を当てた。書肆の主導した浮世草子にはこうした作品が多い。江戸・上方という地域性を越えて、観劇する草子読者と草子を読む観客とが重なって享受者層が拡大し、書肆がそれに見合った出版活動を行ったからである。その特性を、従来未紹介の稀観本を例に考察する。

### (2) 江戸・上方間の相違など出版文化の地域性に関わる考察

江戸版浮世草子は半紙本で出版されることが多いのだが、料紙の紙質、題簽意匠、挿絵にも上方版とは違った特徴がある。横本が登場する元禄末期まで、上方版浮世草子は大本で出版されるが、好色本にかぎると半紙本がほとんどである。これは上方版好色本が、下し本として江戸で販売されたからだと推測する。本研究では、とくに江戸書肆の出版活動に注目し、出版メディアの地域性について考察する。

### (3) 求板本についての考察

書肆が版木を買い取った求板本には改題本が多いが、同板であっても、版木の一部を入木して改刻されることが多い。改刻は版木の痛みを修訂するためだけでなく、様々な原因が想定できる。改刻にいたる諸要因について考察する。

## 3. 研究の方法

現存する出版書から、江戸・上方間の出版物の相違や出版文化の地域性を考察するには、その時期の出版形態をそのまま残す初版本を考察の対象にすることが望ましい。その点で、高い資料性をもつ本と出会う事が必要となる。現行の目録類は、そういう観点から編纂されていないので、現存本を極力披見しなければならない。

上方と江戸という地域性や、流通形態が文学に与えた影響などが、浮世草子研究では軽視されるくらいがあったが、この点を是正するには、浮世草子諸本の厳密な書誌調査が必要となる。すなわち原本を閲覧し、紙質や版木の状態を確認しつつ、刊(刊行時)・印(印摺時)・修(版木修訂時)を厳密に調査することが不可欠である。とりわけ、改題本・求板本の場合には、書誌調査

に加えるに、改題や改刻に到った理由を考証しつつ、出版システムをめぐる諸問題について考察する必要がある。しかしながら、2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、原本閲覧目的の出張調査ができず、不本意ながら研究方法を変更せざるを得なかった。

変更点の第一は、元禄期浮世草子の改題本・求板本を網羅的に調査することが不可能となったので、考証する書物をしばったことである。手持ちの写真や公開されているウェブ資料を用いて、分かる範囲で改刻を確認することにした。ただし、写真やウェブ画面を使用するだけでは書誌学的情報量が限定されるので、端末でも入手できる原本はできるだけ購入する方針で臨んだ。また、本研究は、国内の諸本とホノルル美術館リチャード・レイン旧蔵本について、刊（刊行時）・印（印摺時）・修（版木修訂時）を厳密に考証した諸本調査を予定していたが、この調査も断念せざるを得なかった。

#### 4. 研究成果

(1) 演劇と小説との様式的複合が見られる作品として、貞享5年刊、江戸版『市野や物語』に焦点を当てた。この作品は、上方より十数年前から演劇と小説とを複合する傾向が見られる点で注目される。上方の版元に江戸売り捌き元を加えた三都版が現れ、上方版の重版・類版が、貞享2・3年頃から江戸では出版できなくなった。窮地にあった江戸書肆によって新規な草子が企画されたことが、上方より早く、このような浮世草子が刊行された理由だろう。

改題本・求板本の改刻は、版木の痛みを修訂するためだけではなく、様々な要因によって行われる。特に演劇を取り入れた浮世草子の場合には、実在の人物や役者名を彫り変える場合もある。小説と演劇との様式的複合は、事実と虚構とが作中に並存し、小説に際物のような時事性が付与されるなど、文学の多様化をもたらすこととなった。

その一現象として、特に注目されるのは、元禄末期の上方版浮世草子の叙述に、歌舞伎口上や長台詞がそのまま写された例が多く見られることである。大坂松本名左衛門座顔見世興行の場面のある『男色歌書羽織』には、実際に舞台上で述べられた台詞が、そのまま詳細に書き写されている。このような叙述は、歌舞伎に精通した浮世草子読者の趣味に作者が応える必要があったから出現したのだろうが、洒落本や滑稽本、人情本が、台帳様式で叙述されるようになる素地は、すでにこの時期に胚胎していた。

(2) 江戸書肆と上方書肆との出版慣行の相違は、挿絵のみならず書型や題簽の意匠にも顕現する。これまでの調査で、上方で刊行された好色本のほとんどが、江戸版と同じ半紙本の書型をもっていることが判明していた。これは上方版好色本が、下し本として江戸で販売されていたからだろう。とくに京書肆西村市郎右衛門と江戸書肆西村半兵衛の出版物に、この傾向が顕著である。

一方、上方版を真似た表紙と大本の書型で出版された江戸版仮名草子が、稀ではあるが存在した。たとえば『鹿の巻筆』初版本には、当時上方で流行していた紗綾形地巻竜紋行成表紙の中央に題簽を貼る。料紙も腰の強い上方製を用いている。匡郭は半紙本型なので、明らかに貞享2・3年頃の上方版浮世草子を模倣している。興味深いのは、西村市郎右衛門刊『好色三代男』や西鶴『諸艶大鑑』などに使用された上方版紗綾形地巻竜紋行成表紙ではなく、江戸独自の巻竜紋表紙を用いていることである。

(3) 貞享3年2月に、京・永田長兵衛と江戸・西村半兵衛二書肆相版で刊行され、書肆・俳諧師西村市郎右衛門（未達）が作者と推定されている『好色伊勢物語』という浮世草子がある。阪本龍門文庫本が初版本である。この本は元禄7年に『いくのの草子』と改題出版された。版元は京「永田調兵衛」単独版である。さらに同じ書名ながら奥付の刊年を削り書肆名「永田調兵衛」のみを残した改刻本がある。この改刻本の原裝の善本を入手した。『好色伊勢物語』『いくのの草子』の主版元は「永田長（調）兵衛」なので求板本ではないのだが、求板本同様に、巻1の2・3・6・15丁の版木が元禄7年版では欠落し、刊年を削った版では新しい版木が補われている。装幀から考えて、無刊年本は享保ごろ刊行されたと推定する。「長兵衛」を「調兵衛」と屋号を替えているのは代替わりに伴う変更であろう。管見では元禄4年以降「永田調兵衛」が用いられている。また初版本で相版元となった「西村半兵衛」は元禄9年以降出版物が見られなくなるが、元禄7年には書肆としての活動をまだ続けていた。通例では、版木を買い取った書肆が求板本を改刻する場合には、版木の痛みを修訂する機会が多いのだが、他にも様々な原因が想定できる。本書のケースは、初版本からわずか八年後に刊行された改題本の巻1の4丁分の版木だけが欠落し、そのまま改題本として刊行され、さらに享保期に版木が補われているという不自然さが目立つ。4丁分の版木は「西村半兵衛」の板株（版權）を保証する留板だったのではないかと推定される。

(4) 伝本の少ない江戸版浮世草子の場合、原裝の完本が出現することは、きわめて稀である。幸い、江戸の代表的作者桃林堂蝶磨の最後の浮世草子、宝永二年刊『武道色八景』を早稲田大学図書館が購入した。完本は、ワシントンDCフリーア美術館ブルヴェーラコレクションの一本しか知られていなかった稀観本である。本書の解題と翻刻を発表したが、本書の出現により、絵師名が「鳥居清信」と挿絵に描かれていること、版元が桃林堂『好色桐の木枕』を刊行した「平野屋吉兵衛」であることが確認された。また桃林堂『好色美人相撲』の主人公は江戸の立役中村七三郎に擬されるが、当時は役者も俳諧を嗜んだ。その俳諧活動を調査した。

(5) 西鶴を中心に、その叙述の特徴等を、俳諧を視座において文学史に位置づける考察を行った。江戸時代文学を「近代初期」文学として位置づけ、十七世紀文学の文学史座標軸と叙述史をテーマにした論文二編を発表した。叙述史を中心テーマにした論考では、西鶴の叙述意識が談林

俳諧の俳文意識に重なり、西鶴を剽窃した江島其磧や江戸の桃林堂の叙述からは、その俳文意識が希薄になった点を指摘した。

『去来抄』には、西鶴の文章を芭蕉が俳文として批判する言説がみられる。芭蕉が批判した西鶴の文章は、直接的には『好色一代男』『難波の顔は伊勢の白粉』等の、天和・貞享期の浮世草子・役者評判記だが、仮にこれらを「談林俳文」と名付ける。西鶴の「談林俳文」の新しさは、読者の想像力が、異なるコンテキストの衝突から、新しい意味を創造した点にある。この関係は、前句に付句をぶつけて、打越（前句の前の句）と前句とは異なる意味世界（コンテキスト）を創造する俳諧連歌の方法と共通する。一昼夜で何句詠めるかを競う西鶴の矢数俳諧は、複数人の連衆（連句を作る仲間）の座（創作共同体）を、一人の創作者と不特定多数の享受者に変質させた。西鶴小説の作者と読者との関係は、上ノ下の啓蒙的關係にあるのではなく、矢数俳諧の連衆のように西鶴と等身大、すなわち水平的關係にあった。十七世紀文学は、量とスピードを重視する文化のもとで版本メディアによって古典を享受した人々が創作したことに特性がある。

。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中嶋隆	4. 巻 117
2. 論文標題 近代前期（近世）散文研究の「学際性・社会性・国際性」－西鶴を中心とした前期散文研究の問題点－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 pp.76-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆	4. 巻 103
2. 論文標題 西鶴『誹諧独吟一日千句』第六註解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近世文藝研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.75-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆	4. 巻 21
2. 論文標題 西鶴から桃林堂へ－近代初期（近世）文体論序説－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 pp.11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆ほか	4. 巻 101
2. 論文標題 早稲田大学図書館新収『武道色八景』解題と翻刻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.14-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 21
2. 論文標題 『患方の富士』翻刻と解題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学大学院日本文学論叢	6. 最初と最後の頁 pp.98-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 22
2. 論文標題 初代中村七三郎と俳人の交流圏	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和光大学表現学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆 大山和哉 岡本聡 雲岡梓 鈴木淳 復本一郎 藤江峰夫	4. 巻 98
2. 論文標題 『拳白集』評釈(三)巻八	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.86-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆 荻原大地 久保彰恒 小林俊輝 晝田葵 劉欣佳	4. 巻 98
2. 論文標題 灰屋紹由『春の雪や』百韻注解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.216-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋隆 大山和哉 岡本聡 雲岡梓 鈴木淳 復本一郎 藤江峰夫	4. 巻 99
2. 論文標題 『拳白集』評釈(四)巻九	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.61-122
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐 久保彰恒 佐久間光瑞 劉欣佳	4. 巻 98
2. 論文標題 『代々蚕』「初午や」歌仙註解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.196-215
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大山和哉 岡本聡 雲岡梓 鈴木淳 中嶋隆 復本一郎 藤江峰夫	4. 巻 97
2. 論文標題 『拳白集』評釈(二)巻七	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.109-222
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大山和哉 岡本聡 雲岡梓 鈴木淳 中嶋隆 復本一郎 藤江峰夫	4. 巻 96
2. 論文標題 『拳白集』評釈(一)巻六	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.99-177
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐, 宝利彩夏, 小林俊輝, 戸口桃吾	4. 巻 96
2. 論文標題 北枝点「立秋や」歌仙註解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.221-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤勝明, 玉城司, 伊藤善隆, 服部直子, 越後敬子, 稲葉有祐	4. 巻 96
2. 論文標題 『きくいたゞき』「他力あり」歌仙分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 pp.204-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中嶋隆
2. 発表標題 近代前期 (近世) 散文研究の「学際性・社会性・国際性」－西鶴を中心とした前期散文研究の問題点－
3. 学会等名 日本近世文学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中嶋隆
2. 発表標題 西鶴の俳諧と浮世草子 『誹諧独吟一日千句』の創意－
3. 学会等名 早稲田大学国語教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 初代中村七三郎の位置－元禄期江戸俳壇と梨園－
3. 学会等名 俳文学会東京研究例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 其角・嵐雪・桃隣 江戸の多彩な俳諧師たち
3. 学会等名 大垣市教育委員会 おおがき芭蕉大学（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中嶋隆
2. 発表標題 江戸時代初期「武士道」の成立と「男色」
3. 学会等名 韓国檀国大学日本語日本文化学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 興と俳諧 - 「句兄弟」の思想的背景と研究史上の問題をめぐって -
3. 学会等名 俳文学会東京例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 異域 としての遊廓 元禄・享保期の江戸俳諧を視座に
3. 学会等名 説話文学会9月例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中嶋隆	4. 発行年 2023年
2. 出版社 株式会社 文学通信	5. 総ページ数 334
3. 書名 『俳諧独吟一日千句』研究と註解	

1. 著者名 大山和哉 岡本聡 雲岡梓 鈴木淳 中嶋隆 復本一郎 藤江峰夫	4. 発行年 2023年
2. 出版社 株式会社 和泉書院	5. 総ページ数 642
3. 書名 『拳白集』和文篇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「東アジアの知識交流のメカニズム：知識の生産と伝達」を開催 <a href="http://flas.waseda.jp/jcs-j/">http://flas.waseda.jp/jcs-j/</a>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	稲葉 有祐  (INABA Yusuke)  (90649534)	和光大学・表現学部・准教授     (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関